



福島県立ふたば未来学園初年度前期の取り組み（概要）

平成 27 年 10 月 15 日

福島県立ふたば未来学園高等学校

双葉地区 8 町村、福島県、ふたばの教育復興応援団など関係機関のご支援をいただき、無事開校し、教育活動を滞りなく開始することができたことに厚く御礼を申し上げます。

学校においては、「変革者たれ」という「建学の精神」のもと、「自立」「協働」「創造」を校訓として、未来を創造する先進的な教育活動を開始し、初年度前期を終了したところです。

○ 被災した生徒達の学びを支える取り組み

1. 大学生による学習支援

小学校 5 年生時に震災、原発事故によって避難を余儀なくされ、度重なる転校や仮設住宅の環境によって遅れた学習を取り戻すため、中間／期末考査前 10 日間にわたって、10 名以上の教職を目指す福島大学生が寄宿舍に泊まり込み、生徒の学生を支援している。



2. 徹底的な習熟度別の授業

英数国は各クラスを習熟度別に 2 クラスに分け授業を展開している。学力差の大きな集団に、よりきめ細かく対応するため、習熟度別に 5 クラスに分け、タブレットとリクルート社受験サプリも活用しながら、毎週放課後の英数国の課外授業も始まった。また、英数については学力上位層向けの朝の課外授業も実施する。

○ 双葉郡の復興や全国世界に貢献する人材を育成する「未来創造型教育」を展開

1. 地域の復興の課題を見つめる（SGH）

生徒達は 7 名のグループに分かれ、町役場、商店、東京電力等を訪ね、地域の現状を調査し、復興に向けて地域が抱えている課題を演劇で表現した。多面的に復興の課題を見つめ、自らの言葉で語ることは、今後の学習の土台であり、今後 SGH の枠組みの中で、生徒自ら復興のプロジェクトを企画・実施していく。



2. 海外研修・世界への発信（SGH）

生徒の代表7名が夏期休業中に、チェルノブイリ原発事故の被害を受けたベラルーシを訪問し、前述演劇を英訳して演じた。また、帰国後、広野町で行われた国際フォーラム『被災地・広野町から考える』に登壇し、海外研究者約20名や地域の方々に向けて、演劇を披露するとともに地域の復興に向けた意見交換を行った。

また、8月にはジーナ・マッカーシー米国環境保護庁長官を迎え、意見交換を行った。長官からは強く感銘を受けたとのコメントがあり、来秋の米国研修時に環境保護庁で再会することとなった。なお、SGHでの取り組みでは、米国に先立ち、年明けにタイ王国（現地大学と交流）及びドイツ（IB校との交流）への生徒派遣を予定している。



3. 全国の地方創生先進事例からの学び（SGH）

OECD東北スクールの後継事業である「地方創世イノベーションスクール2030」に参加し、将来生じる少子高齢化や環境問題等の全国の課題を学び、復興を超えた持続可能な地域作りを構想した。今後授業内のグループ研究でさらに構想を深めるとともに地域で実践し、平成29年夏に自ら国際会議を企画・実践して提言を発信する。

また、夏期休業中は県内の地熱発電所や、新潟県十日町市等で行われた「越後妻有大地の芸術祭」を訪問し、様々な形で地域の活性化事例を視察した。

9月には島根県海士町のSGH校、隠岐島前高校生が本校寮に2泊の日程で来校し、合同で双葉郡内をフィールドワークし、それぞれの地域の活性化について意見交換を行った。隠岐島前高とは今後も密に連携していくこととなった。



4. ふたばの教育復興応援団による授業

応援団と教員がひとまとまりの単元を「協同責任編集」する授業をカリキュラムに位置づけながら展開している。平田オリザさんによる演劇制作の授業に続き、10月からは応援団4名をお迎えして4つのゼミ※を開講し、生徒たちが地域の課題を乗り越えるプロジェクトを企画実践し、11月の学園祭で地域に向けて発表する。

* 宮田亮平学長「アート之力」、為末大さん「スポーツ之力」、

箭内道彦さん「祭りの力」、平田オリザさん「ドラマの力」の4テーマ

前期はその他に、山崎直子さん、為末大さん、林修さん、箭内道彦さんによる授業が行われた。また、三島長嶺校舎、猪苗代校舎も含めた全校生の宿泊学習において小泉進次郎復興大臣政務官を迎えて意見交換を行った。



5. 双葉郡内のサテライト高校生徒会との連携

来年度末に休校となる双葉郡内のサテライト高校5校の生徒会に働きかけ、交流会を継続的に実施している。各校の伝統を引き継ぎ、必ず将来各校を復興させるという強い思いが全体で共有されている。生徒の発案で、10月に行われる双葉郡8町村の祭り「ふたばワールド in ならば2015」で合同ブースを出展し、地域に各校の取り組みや復興への想いをアピールすることとなった。



○ 全国の学びの変革の先駆けとなることを目指した取り組み

1. カリキュラム開発・カリキュラムマネジメント

復興に貢献し、全国世界で活躍する人材の育成を目指し、育成する資質・能力をルーブリックで定義し、3ヶ年のアクティブ・ラーニングで育成していくカリキュラムを構築。教育課程企画特別部会での議論とも連携しながら、今後の指導要領改訂時の全国の参考となるよう推進。

学年	科目	学習目標	学習内容	評価	備考
1	英語	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	数学	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	国語	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	社会	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。
2	英語	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	数学	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	国語	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	社会	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。
3	英語	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	英語の基礎知識を身に付け、英語でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	数学	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。	数学の基礎知識を身に付け、数学でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	国語	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。	国語の基礎知識を身に付け、国語でコミュニケーションを図る能力を育成する。
	社会	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。	社会の基礎知識を身に付け、社会でコミュニケーションを図る能力を育成する。

2. 教員研修

教員のアクティブ・ラーニングの指導力向上の研修を積極的に実施。教職員間での議論、大学教員を招いての教科別に分かれての研修、鈴木寛大臣補佐官、OECD 田熊シニアアナリスト、平田オリザ氏等を講師として招いての研修等を行っている。教員は「解のない課題への挑戦を後押しする」授業に果敢に取り組んでいる。



以上